

ひろ子さんの思い出

高校、大学生のころ、私の部屋に薬師丸ひろ子さんがいた（人型の等身大看板）。

角川書店（現：KADOKAWA）は、70年代後半から80年代に出版から映画へ進出し、日本のメディア文化をリードしていく。社長の角川春樹は強烈な個性と行動力を持った人で、自社で出版している小説を次々に映画化し、そのことで書籍の販売拡大を狙った。映画には、高倉健、松田優作、草刈正雄、石坂浩二など大物俳優を起用し、世界的に有名なアメリカのロバート・ボーンまで出演させた。映画はヒットし、「角川映画」は社会現象になっていく。そして、薬師丸ひろ子、原田知世、渡辺典子を育てた。角川春樹が手掛けた初期の映画が、横溝正史『犬神家の一族』、森村誠一『人間の証明』である。文庫本の表紙にタレントや映画の一場面をデザインするのは今では普通だが、これも角川書店が始めたものだと思う。薬師丸ひろ子さんの顔がアップでデザインされた『ねらわれた学園』を見つけたときは衝撃的で※すぐに持ち帰った。



もに、なぜか郷愁を感じさせられ、強く、強く、そこに行きたい。高倉健、薬師丸ひろ子、陳腐な街並み、そして、遠い後方の高架を貨物列車の有蓋車が通り過ぎているのが、なぜか私を引き付けている。

「Y字路」「線路」を手掛かりにグーグルマップで調べた。金沢市堀川町にそこはあった。

青春を共に過ごした彼女と2015年に再会することになる。私は「あまちゃん」の最終回の撮影にエキストラとして参加した。最終ロケということで、そこに出演がないながら彼女は来ていた。

50メートルほどのところに彼女は佇んでいた。声をかけるには遠かった。

※すぐに持ち帰った → 母の実家が本屋だったので、そこでは欲しい旨を話せば会計はいらなかった。

※コピー → 広告の文章、広告の文案。（佐藤貴之）

読んでから見るか、見てから読むか

「読んでから見るか、見てから読むか」

角川文庫の※コピーである。角川映画は、森村誠一『野性の証明』、半村良『戦国自衛隊』、小松左京『復活の日』、片岡義男『スローなプギにしてくれ』、眉村卓『ねらわれた学園』、横溝正史『悪霊島』、赤川次郎『セーラー服と機関銃』、西村寿行『化石の荒野』、つかこうへい『蒲田行進曲』などと続く。

以前、水沢には「みその」「ロマンス」という2軒の映画館があったが、中高生にとっては値段が高く、たまにしか見られなかった。当然Netflixもないので、映画を見るのは本当に見たいものだけだった。最初に見たのは小学校低学年のころ、「ゴジラ対メカゴジラ」だった。「東映マンガ祭り」は盛岡までいかなければ見られなかった。

このコピーがきっかけではないが、私にとって本は「見てから」の縁が多い。そのような理由から、テレビドラマが多い。

司馬遼太郎が好きになったのは、中村梅之助の『花神』や、加藤剛の『関ヶ原』であったし、松本清張は山崎努、名取裕子の『けものみち』。向田邦子は加藤治子、杉浦直樹の『思い出トラップ』、フランキー堺の『あ・うん』。という感じである。

他に忘れられないのは、二谷友里恵の『青が散る』（宮本輝）、小野寺昭の『御宿かわせみ』（平岩弓枝）。そうそう、山田太一シリーズも欠かせない。

昔から気にしていたが、最近になり読んだのは、渡辺謙の『御家人斬九郎』（柴田鍊三郎）。

中村吉右衛門の『鬼平犯科帳』はとてつもなく好きだが、原作（池波正太郎）の文

↑ 角川文庫 眉村卓『ねらわれた学園』

体は合わず読み進められなかった。文体とは相性がある。長女に司馬遼太郎をすすめたが、文中に余談が入るのがなじみず好きになれないといわれた（その余談が面白いと私は思うが…）。

本を読むきっかけはそんなところにもある。

ひろ子さんの話に戻ろう。

彼女は中学1年にして映画『野性の証明』（78年）でデビューし、そのあどけなさ、純真さから、中高生から圧倒的な人気を得ていた。角川書店の『顔』のような存在でもあった。部屋にいたひろ子さんは、角川文庫の販売キャンペーンで使われ、本屋の店先に立っていたが、私がナンパして「お持ち帰り」したものだ。

その後、毎日学校から帰る私を待っていてくれた。遊びに来る友人は、彼女がいることに驚いた。私はその都度彼女を紹介した。

その彼女と別れるときがきた。引っ越しの整理を機に、私は彼女と別れた。今考えると、別れ際に写真を撮っておけばよかったと思っている。

話は右往左往する。

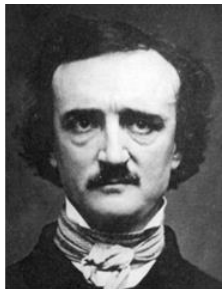
ずっと金沢に行きたいと思いながら行けずにいる。これを話すと「金沢いい街ですよ… ひがし茶屋街とか21世紀美術館とかあるし、冬はカニもおいしいですよ…」などといわれるが目的は全くそこでない。『野性の証明』のロケ地があるからだ。金沢の小さなY字路に高倉健と薬師丸ひろ子がいる場面が、その陳腐な街並みとと



↑ 今も大切にしている角川文庫の宣伝ポスター
このほかにも2枚ある

エドガー・アラン・ポーを知っているか？

江戸川乱歩がエドガー・アラン・ポー(1809～49年 米国)からその名をとっていることは、今さら言うまでもない。ポーが書いた『モルグ街の殺人』が世界最初の推理小説とされ、このことで彼は「推理小説の父」といわれている。



しかし、ポーは推理小説の専門家であったわけではなく、怪奇幻想、SF、冒険、風刺、戯曲、評論…あらゆるジャンルに数々の傑作を残した。そして、その作品は、世界中の作家、音楽や絵画、映画などの芸術家にインスピレーションを与えてきた。例えば、アガサ・クリスティ、コナン・ドイル、クロード・ドビュッシー、大岡昇平、阿部公房。

ポーの小説は、ほとんど1時間で読める短編である。これは、「人間の集中力は1時間程度しか持たない」とポーが考えていたためといわれている。

今回の特集では3冊を並べた。

『黒猫・アッシャー家の崩壊』

『モルグ街の殺人・黄金虫』

『大渦巻への落下・灯台』

江戸川乱歩『少年探偵シリーズ』

昭和の時代、「小学生必読の書」「小学生のバイブル」みたいな本であった。私も数冊持っていた。

小さいころから読書好きだった長女に(4年生のころ)、この第1巻『怪人二十面相』を「よかったら読んでみて」と渡した。すると、娘は夢中になり、ほかの本も読みたいたっていった。

当時住んでいた大船渡の図書館に行った。昔はどこの図書館でも目立つところにおいてあったこのシリーズだが、見当たらない。図書館の係員に相談すると、書庫にしまってあるとのことで、あれほどのものが、今は書庫に行ってしまったことに、愕然とした。しかも全巻(46巻)はそろっていないという。

その後、全巻読みたいという娘のために、盛岡の県立図書館や盛岡市立図書館などへ行って、次々と借りたことがある。

46巻読み終えた娘に、同じ乱歩の『人間椅子』を渡した。夢中になりそれも読み終えた。6年生のころだったと思う。

娘には、「小学生に『人間椅子』を薦めるのはいかなものか」と今になりいわれる。

中学1年の誕生日に「江戸川乱歩全集が欲しい」と言われた。調べてみると「江戸川乱歩全集」は新本ではなかなかなく、神保町の古書店でいいものを見つけて買ってやったことがある。その後も、池袋の立教大学にある「江戸川乱歩記念館」に行くなど、娘は江戸川乱歩ファンになった。

この夏、板橋区立図書館に行ったが、なんとそこには、少年探偵シリーズ全46巻が、すぐ借りられる状態ではなかった。一目置ける図書館のように感じた。

今月のライブラリーストリートに、江戸川乱歩を置いたので、ぜひ読んで欲しい。

実は、すでに乱歩ファンとなった水高生が数名いる。

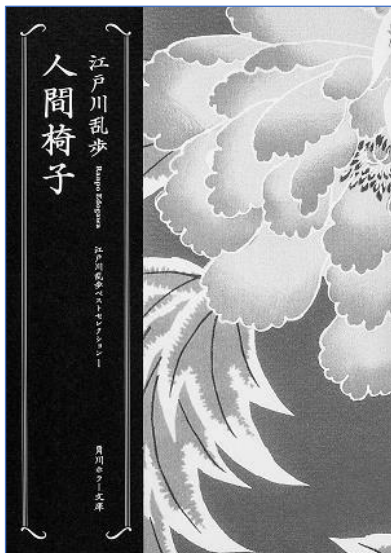
↓板橋区立図書館の『少年探偵シリーズ』



怪奇・ミステリ・推理小説 特集

江戸川乱歩『人間椅子』

外務省書記官夫人である佳子は、美しく才能豊かな女流作家としても知られていた。そんな佳子の元へ、ある日長文の手紙が届く。ある男からの罪の告白であった…。肝を冷やす“人間椅子”の秘密とは！巧みな構成とスリリングな物語の表題作の傑作



横溝正史『犬神家の一族』

湖面に突き出た殺された男の下半身。あまりにも有名な映画のシーンである。信州財界一の巨頭、犬神財閥の創始者犬神佐兵衛は、莫大な遺産の分配を書いてあると思われる遺言状を残して他界した。場面は昭和初期。昔ならではの、複雑な血縁関係と人間関係のなかで、遺言状をめぐる思惑が交錯する。そして、太平洋戦争もそこに絡む。そして、何人もが殺されていく。スリルとサスペンスにみちた長編推理。有名なので、ぜひ読んで欲しい。



森村誠一『人間の証明』

「母さん、僕あの帽子、どうしたでせうね?」。西条八十の詩集を持った黒人が、ナイフで胸を刺されて殺害された。被害者は「日本のキスミーに行く」と言い残して数日前に来日したという。日米合同捜査が展開され、棟居刑事は奥深い事件の謎を追って被害者の過去を遡るが、やがて事件は自らの過去の因縁をも手繰り寄せてくる。人間の“業”を圧倒的なスケールで描ききった、巨匠の代表作にして不朽の名作。



Mizuko Style ~深く味わい、じっくり考える~
これらの本はライブラリーストリートに置いてあります